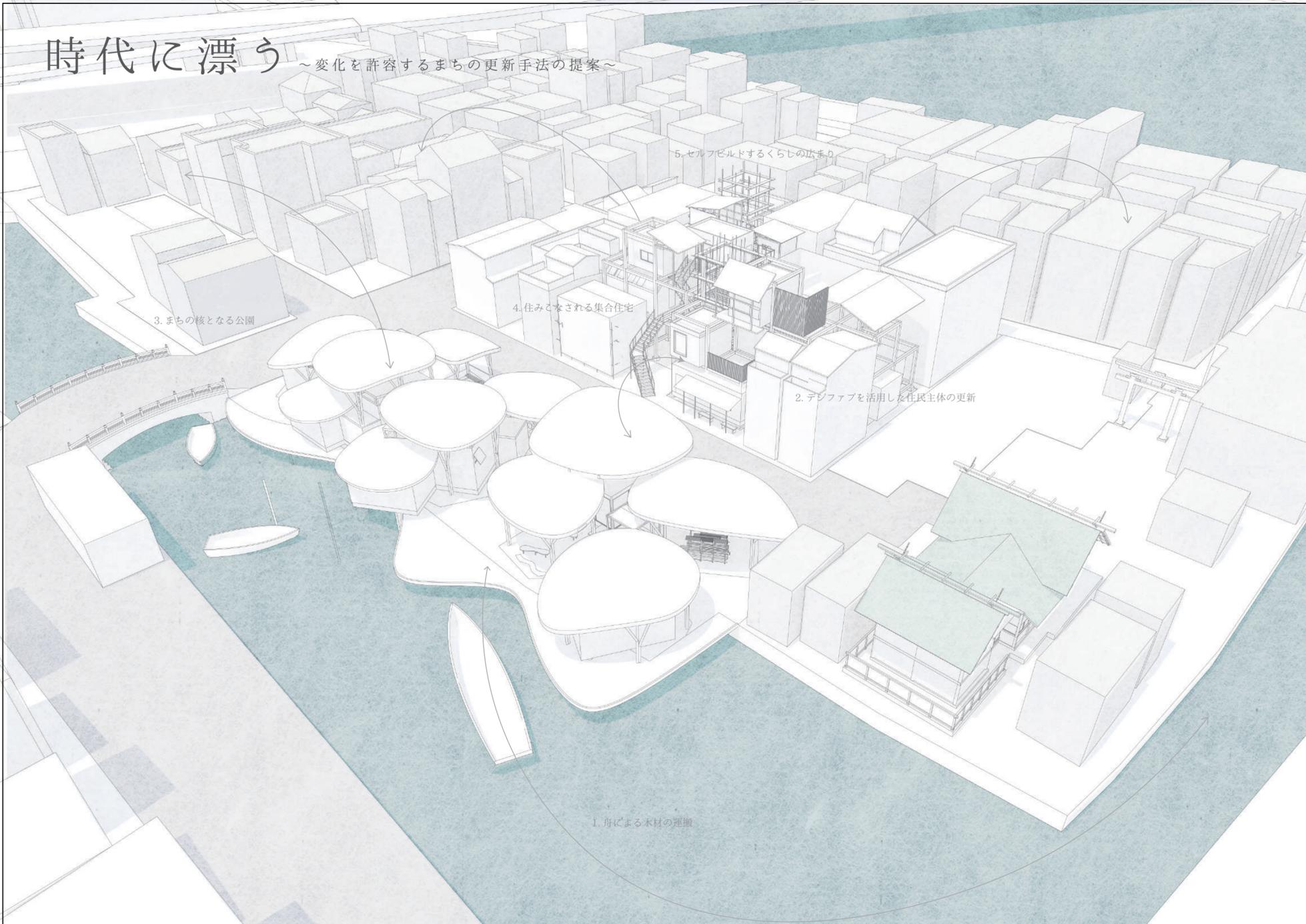


時代に漂う

～変化を許容するまちの更新手法の提案～



5.セルフビルドするくらしの広まり

4.住みこなされる集合住宅

2.デジタルファブを活用した住民主体の更新

3.まちの核となる公園

1.舟による木材の理髪

00-1 卒業設計を考えるきっかけ

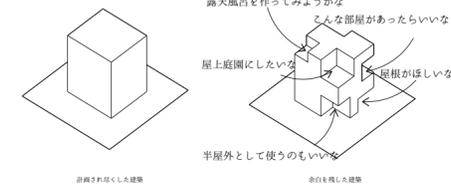
全体像



下町が家屋の老朽化によって次々とタワマンに建て替えられる光景を目の当たりにし、それによって作られるアンバランスな風景に違和感を抱いたことが卒業設計を考えるきっかけとなった。

00-2 余白を残した建築計画の可能性

全体像



建築家による完璧な計画ではなく、余白を残した設計をすることで、使い手の創造性を誘発し、使いこなしながら地域性を獲得する建築を造る。

01-1 都市更新の現状

背景



戦後復興のためのスクラップアンドビルドで都市を更新した。建設業を初めとする多くの業界を活性化し、日本の経済の支えをした。

01-1 都市更新の現状

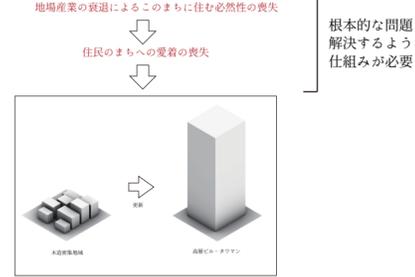
背景



しかし、現代において大量生産・大量消費的な経済循環は限界を迎えている。今まさに、都市の更新手法の転換を行う必要がある。

01-2 現在の都市更新手法の問題点

問題



そもそも人口が減少した理由は、住民のまちへの愛着が失われている現状があるからなのではないかと考えた。そしてその原因は地場産業の衰退であり、町から縁を切りに外へ出る人々が増えたことそのまちに住む必然性が薄れ、住民の生活と町の活動の間に隔たりを生むこととなった。そしてまちへの愛着が失われるという結果に至ったと考えられる。

02-1 ものに愛着を感じる心理

提案

DIY・セルフビルド

完成した家具

自分で作ったものに愛着を感じやすい

×

デジタルファブリケーションツール

3D プリンター

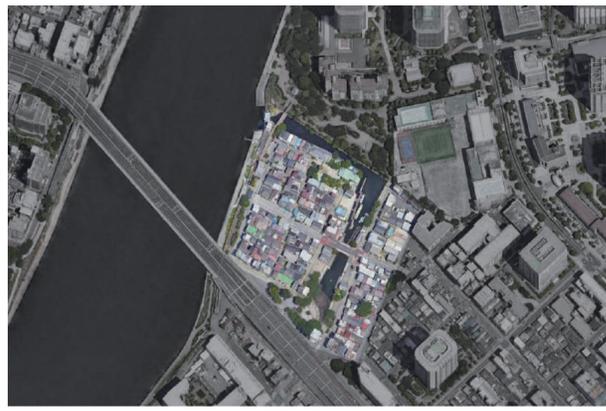
CNC ルーター

デジタルファブはものづくりの幅を広げる

⇒ 住民主体の更新によって
まちへの愛着の創出する

03 下町情緒の残るまち「東京都中央区 佃」

敷地



現在

まちの更新手法に問題を抱えている敷地として東京都中央区佃島を敷地とする。佃島は空襲を免れたことで近代以前と近代以降の建築物が並列する貴重な東京の下町だ。江戸時代に埋め立てられ、人が移住してきたことがこの町の起源である。



05 佃島に建つ家屋の外観調査

敷地調査



調査一覧（抜粋）

20.
用途：住居
階数：2階建て
推定建築年代：Ⅰ期

アソビの使いこなし
・植木鉢
・バルコニー
・庇

memo
明治前からの地に建つ歴史ある市街地の住宅。正面の戸から入ると広い土間と内府がある。住民の間とよむことよからかつての間に庇は撤去されまわられていたらしい。

31.
用途：住居
階数：平屋
推定建築年代：Ⅱ期

アソビの使いこなし
・植木鉢
・庇

memo
富岡屋の事務所。午前中に訪れると従業員やオーナー夫婦と見られる高齢の男女が植木鉢に水をやりたり、雑談をしたりする。富岡屋は小さな倉庫で、仕事道具であらうはしてなどが設置されている。

42.
用途：住居
階数：3階建て
推定建築年代：Ⅰ期

アソビの使いこなし
・2階の増築部分のせり出し
・煙突

memo
非常に入り組んだ構成で長い年月使われてきたことでの外観が作られたとならうとても感服だ。2階がリノベーションのような機能をもっているのは引き継ぎ調査する価値があると感じた。お家の仕上げが、タイル、壁紙仕上げといった多種であることも魅力を生み出している。

53.
用途：住居(改修中)
階数：2階建て
推定建築年代：Ⅱ期

アソビの使いこなし
・なし

memo
明治時代よりこの地に立ち続ける家屋。老朽化により、更新作業の真っ最中。壊して新しくするのはなく、前の家の使え部分を使いながら更新していくのが素晴らしい。解体、修繕の風景がまちの代謝を示すランドマークになりそう。

57.
用途：住居
階数：2階建て
推定建築年代：Ⅲ期

アソビの使いこなし
・バルコニー

memo
56の家屋と同じく、違和感のある瓦屋根が特徴。推測ではあるが、建て替える前の瓦葺の跡の屋根を継承している可能性がある。

129.
用途：住居
階数：2階建て
推定建築年代：Ⅲ期

アソビの使いこなし
・ベンチ

memo
比較的新しい住宅だが、軒に梁が出ている部屋によって伝統を継承している。表の開口が大きく、その前にベンチが置かれていることも佃島らしさと言える。

老朽化度合いマップ



プログラムマップ



調査項目

- ・用途
- ・階数
- ・大まかな建築年代
- ・アソビの使いこなし

建築年代の分類

- 第Ⅰ期 戦前
- 第Ⅱ期 戦後～高度経済成長期
- 第Ⅲ期 ～オイルショック
- 第Ⅳ期 ～現在

06-1 住民の住みこなしの現れる空間

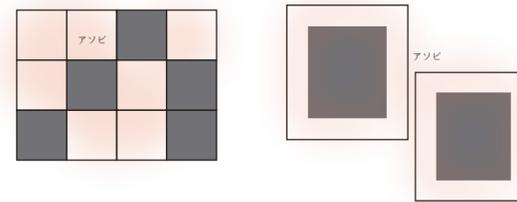
敷地分析



住民の住みこなしは敷地の狭い住宅密集エリアだからこそ、少しでも空間を有効活用しようとする時に現れる独特の風景がある。このような風景は狭い路地を挟んで住むこの地域ならではの風景と言える。

06-2 まちのアソビ」を作ることの有用性

敷地分析



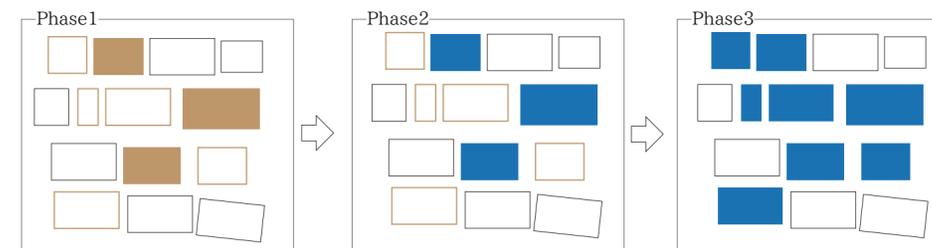
建築物に使い手の創造性を誘発する空間を作る。ここでは、その空間をまちのアソビと呼ぶ。
まちのアソビを残すように建築することで、住民たちによって使いこなされながら地域性を獲得することのできる建築を提案することで変化を許容するまちの更新手法を実現できると考えられる。

07 更新計画の全体像

計画

更新計画

- ・計画地の既存家屋の老朽化度合いを調査する。
- ・調査結果をもとに老朽化の進んだ家屋から順に更新を行う。



敷地選定

- ・計画地は既存プログラムを元に公共的性格を持つ場所と私人的性格をもつ場所の2か所を選定する。
- ・2つの計画地が掛け合わせること新たなまちの更新システムを構築する。

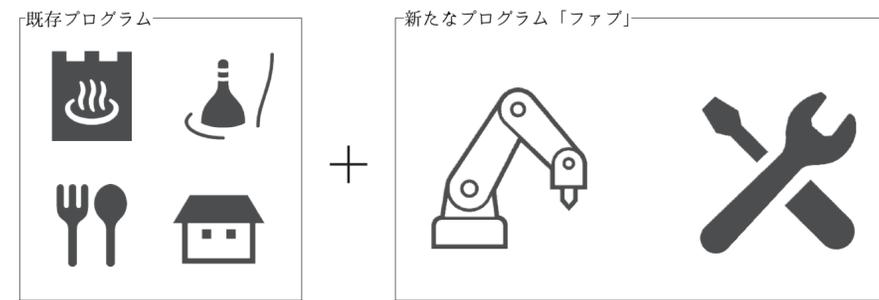


公共的空間

私人的空間

プログラム選定

プログラムは基本的に既存のものを継承しながら新たな要素としてデジタルファブリケーションツールを備えるファブを挿入し、セルフビルドによる町の更新を促す。





既存プログラム



銭湯



釣り船屋



飲食店



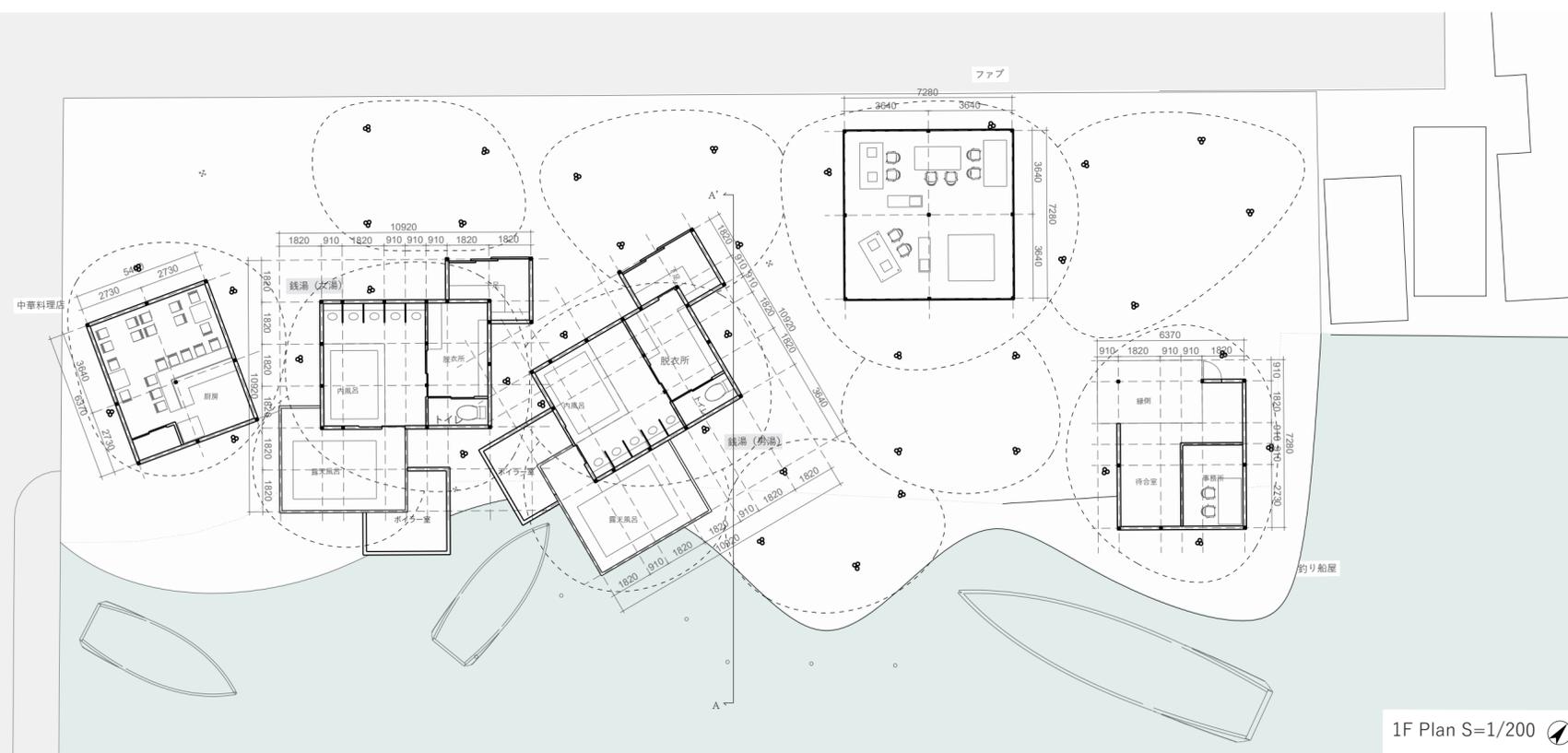
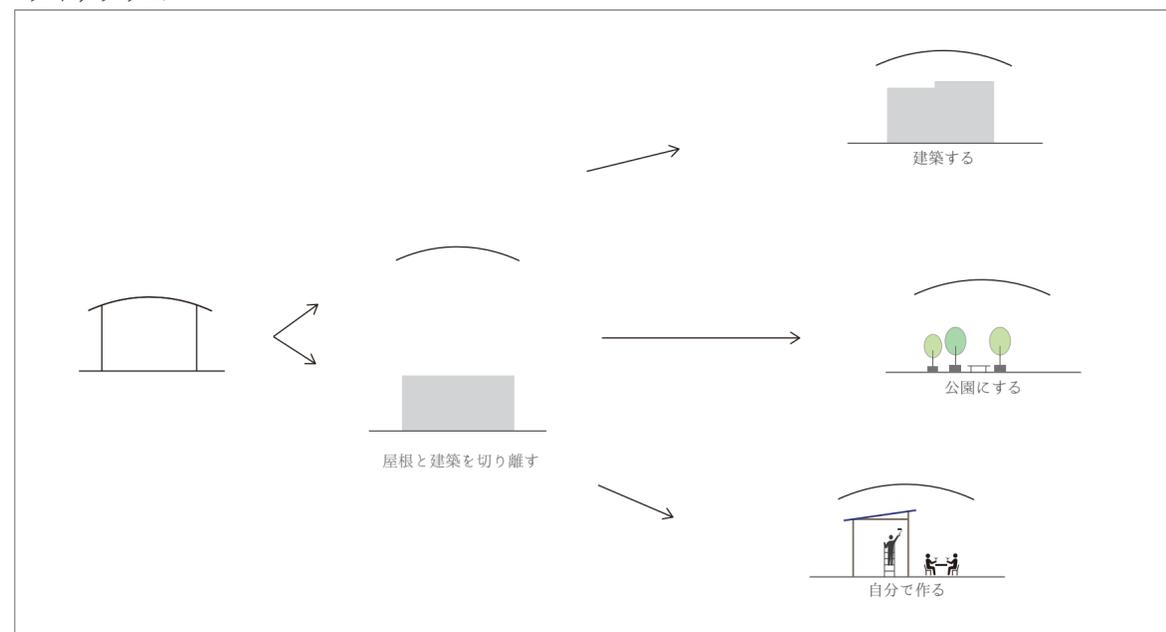
集合住宅

+

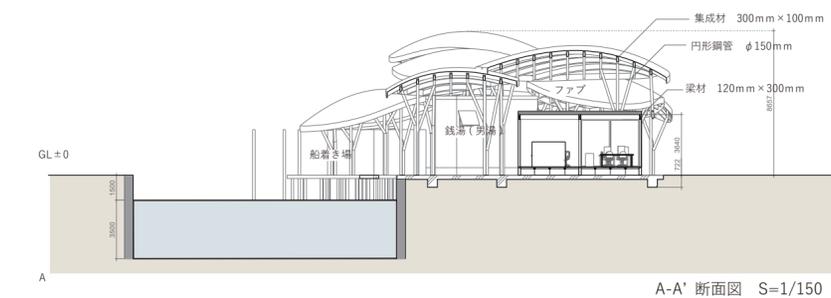
新たなプログラム「ファブ」



ダイアグラム



1F Plan S=1/200



A-A' 断面図 S=1/150

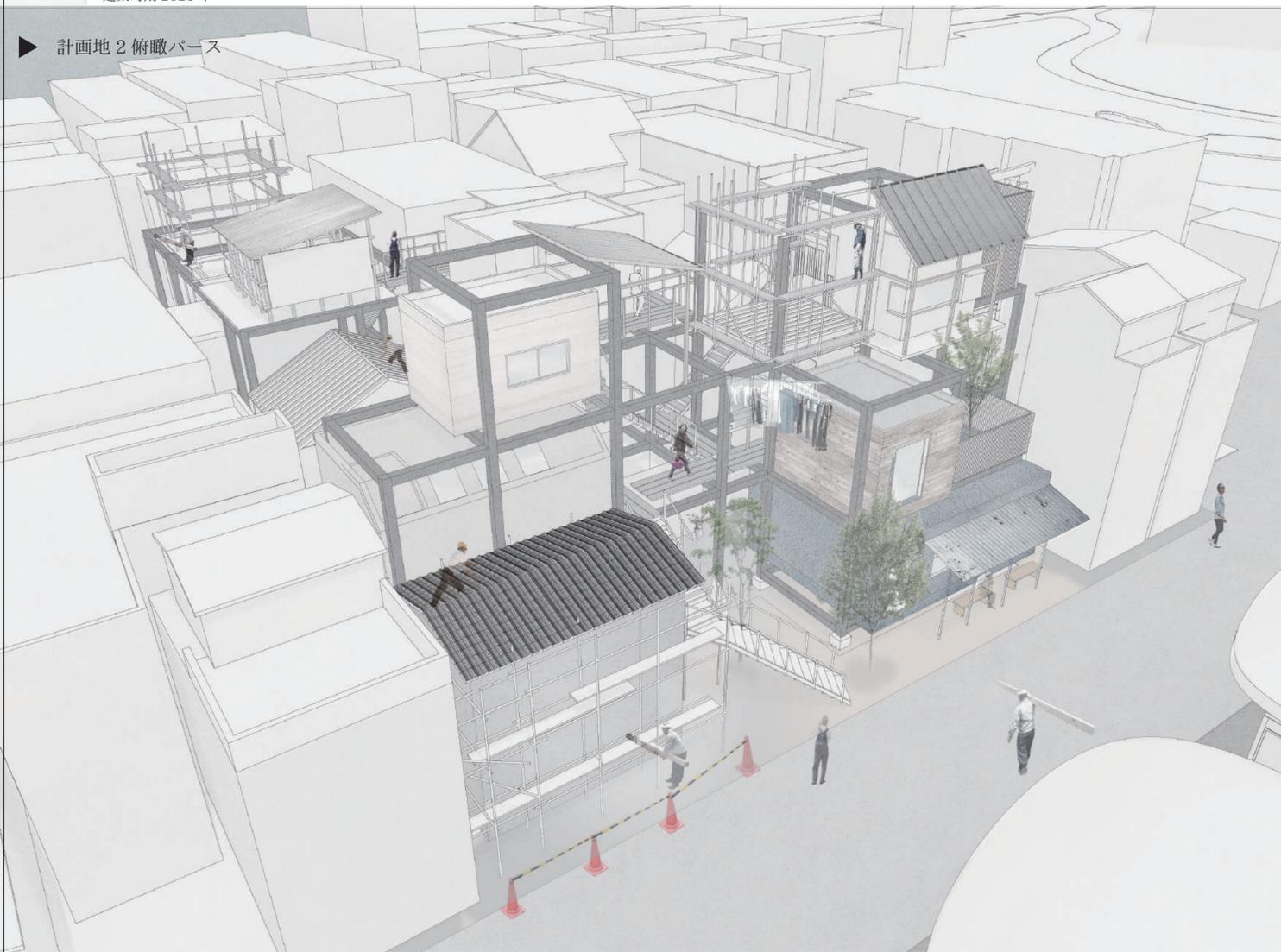


北西立面図 1/400



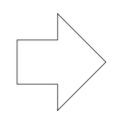
計画地 2 「建築と解体の並列する集合住宅」

建築時期 2025年～



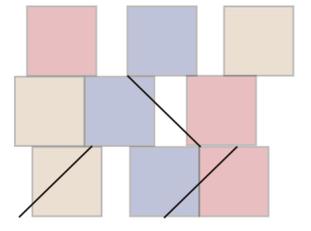
▶ 計画地 2 俯瞰パース

戸建て住宅の空き家が進み、一部空き地がある。
まちの代謝が滞り、活力を失っている。
既存の1住戸1世帯を解体し、集合住宅とする必要がある。

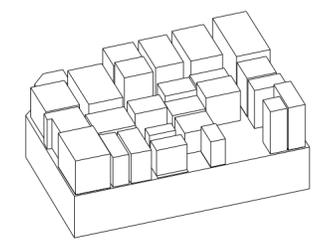


新たなプログラム

セルフビルドによって
住みこなす集合住宅

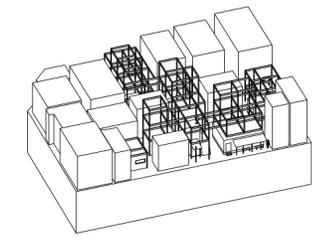


計画ダイアグラム



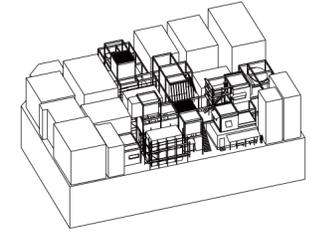
フェーズ 1

既存家屋の老朽化度合いの調査



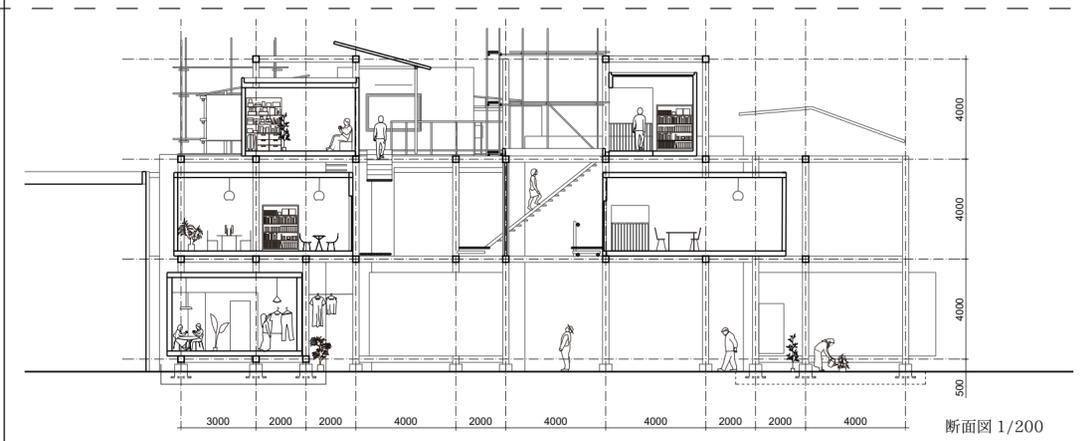
フェーズ 2

老朽化の進んでいる家屋から
解体し、フレームを建築する



フェーズ 3

住民の住みこなしによって
独特の造形が生まれ、まち
の新たな情景を作り出す



断面図 1/200



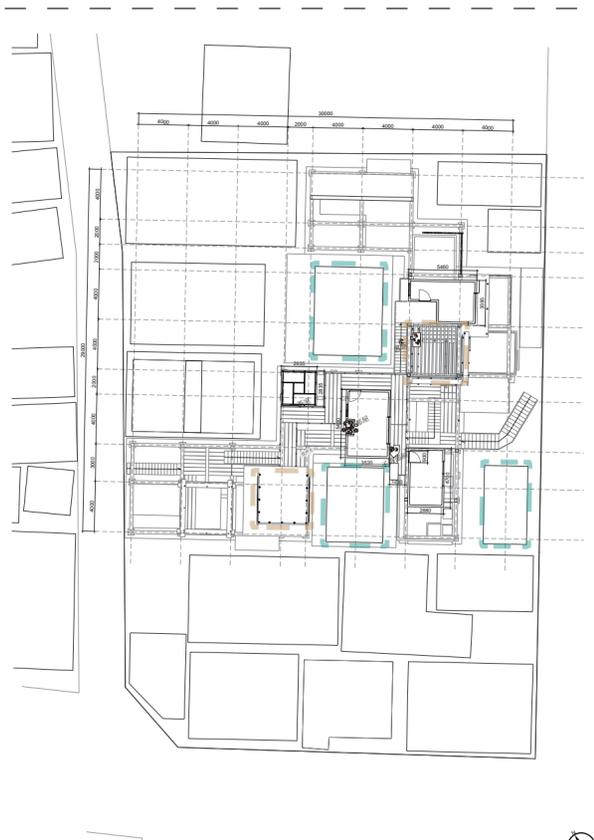
立面図 1/100



1F Plan S=1/600



2F Plan S=1/600



3F Plan S=1/600